

有田郡	加納長右衛門
同	立後市郎右衛門
取扱商店	
大阪市	松本儀助
同	米田松藏
同	安岡虎藏
同	酒井熊一

(六) 足袋

(二) 産額	年	數量	價額
(三) 主要産地	三十八年	一二、六五三、五五〇	三一八、二〇五
	三十七年	一〇、七四四、七二〇	一七三、二六九
	三十六年	九六一、四一〇	八七、一四三
	三十五年	一、一八三、一七〇	一一〇、三八八
	三十四年	八二二、四五九	一一三、二二三
和歌山市			
海草郡			

(三) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數	四二戸
職工數	六四九人
内 男	七三人
女	五七六人

(四) 製産狀況

本業ハ逐年好況ヲ呈シ産額益々増進ノ傾アリ而モ三十六年ハ前年ニ比シ其價額ニ於テ二萬圓餘ノ低下ヲ見シカ三十七年ニ至リテ再ヒ増進シ殆ト三十六年ノ倍額ニ達シ三十八年ハ彌々劇増シ形勢倍々良好ナリ然レトモ經營ハ一般小規模ナリ

(五) 原料ノ需要供給

原料底地ハ多ク河内、備前兩國ヨリ供給ヲ仰キ一部ハ縣内産ヲ使用スル紋羽ハ縣内産、木綿ハ多ク大和産ヲ用キ又幾分ハ縣内産ヲモ使用ス

(六) 製産費及收益ノ比較

種類品等ニヨリ一定セルモ平均一足ニ對シ原料六錢製造費一錢七厘收益一錢位ノ割合ナリト云フ

(七) 販出額及仕向地

産額ノ八分通リハ縣外販出額ニシテ仕向地ハ大阪、京都、神戸、名古屋、中國、九州等トス

(八) 販賣手續及取引慣習

注文ニ應シ着荷ノ上現金取引ヲナス委託販賣等ノ法ニ依ルモノ稀ナリ

(九) 相場

種類品等其他ノ事情ニ依リ多少ノ差異アリト雖モ大約平均一足九錢位ナリ

(十) 荷造法其費用並運賃諸費

本製箱詰トシ釘付ケト爲スモノニシテ大ハ七百足小ハ千二百足ヲ一箱トス其費用凡九十錢ヲ要ス
運賃ハ和歌山市ヨリ大阪マテ凡二十錢ナリ

(十一) 重ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

重ナル製造者

和歌山市

島崎 爲助
中岡 米吉

重ナル取扱商店

特ニ記スヘキモノナシ

(七) 建具類

(一) 産額

年次

價額

三十八年
三十七年
三十六年

二四四、三五九
一七六、三三九
二二六、八四〇

三十五年
三十四年

二二二、九五二
一五四、四九四

(二) 種類別

戸、

障

子、

襖

下地、

襖

椽

(三) 主要産地

和歌山市

(四) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數

三〇九戸

職工數

五四三人

(五) 製造狀況

逐年好況ヲ呈シ産額増加ノ傾アリ但三十七年ハ日露戦争ノ影響ヲ受ケ一般經濟界不振ナリシト海運杜塞シ輸出ノ減少セシトニ因リ産額隨テ減少セシカ三十八年ニ至リ其勢ヲ挽回シ平和克復ト共ニ頓ニ盛況ヲ呈スルニ至リ前途益々有望ナリ經營ハ一般ニ小規模ニシテ家内工業ニ屬ス

(六) 原料ノ需要供給

原料木材ハ秋田縣、奈良縣及本縣産ノモノヲ使用ス供給ハ一般ニ潤澤ニシテ曾テ不足ヲ感ゼシコトナシ

(七) 製造費及收益ノ比較

平均一組ノ製造費及收益

原料代及製造費共

六十一錢

和歌山縣

三百八十三

收 益

六 錢 六 厘

(八) 販出額及仕向地

縣外販出額ハ産額ノ約十分ノ八位ニシテ此中内國向九分外國向一分位ノ割合ナリトス
仕向先ハ内國向ハ大阪、名古屋、九州地方ニシテ外國向ハ神戸ヲ經テ韓國ニ輸出ス

(九) 販賣手續及取引慣習

内國向ハ概シテ注文ニ應シ出荷シ毎月一回若クハ二回取引ス
外國向ハ大阪商人ノ手ヲ經テ輸出シ直接輸出ヲ爲ス者ナシ

(十) 相 場

三十八年中和歌山市ニ於ケル本品ノ相場ハ左ノ如シ

障 子	一 枚	四十一錢主至四十五錢
戸 組	一 組	七十二錢乃至七十七錢五厘

(十一) 輸 出 狀 況

一般好況ニシテ常ニ注文ニ追ハル、ノ有様ナリ尤三十七年中ハ時局ノ影響ヲ受ケ外國向ハ殆ト輸出杜絶ノ狀ナリシ
モ平和克復ト共ニ恢復シ益盛況ニ嚮ヘリ而シテ内地向ハ大部分ヲ大阪ニ輸出シ外國向ハ専ラ韓國ニ輸出ス目下中等以
下ノモノ賣行多シ

(十二) 荷造法其費用並ニ其運賃

特ニ荷造法トシテ記スヘキモノナク概シテ躰繩等ニテ結束スノ
運賃ハ和歌山市ヨリ大阪マテ一組ニ對シ金貳錢トス

(十三) 重ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

重ナル製造者	岡 安 兵 衛
和歌山市	大 野 源 之 助

取扱商店トシテ特記スヘキモノナシ

(八) 傘

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
三 十 八 年	一、一九九、四〇五 _本	二四二、七五八 _円	
三 十 七 年	一、〇八五、四四〇	二二七、九〇八	
三 十 六 年	一、二〇六、一六五	二六五、一二五	
三 十 五 年	一、一九二、〇七四	二二三、一五三	
三 十 四 年	九五九、〇二一	一九五、四八七	

(二) 種 類 別	中 細 傘	子 供 傘
(三) 番 傘		
(三) 主 要 産 地	和歌山市	

和歌山縣

(四) 事業ノ沿革

本業ノ起原ハ明確ナラサルモ徳川氏入國ノ當時和歌山市本町八丁目、九丁目ヲ製造地ニ許セシヲ初期トスルモノ、如ク其後海草郡ニモ之カ製造ヲ始メタリ而モ當時ハ尙ホ微々トシテ僅ニ縣内ノ需用ヲ充タスニ過キサリシカ星宿ヲ經ルニ隨ヒ稍々盛況ヲ呈スルニ至レリ明治初年海草郡ヨリ當業者二三輩東京ニ出テ需要ノ狀況ヲ查察シ當時聲價高カリシ五十二軒華ヲ齎シ歸リ之ヲ模擬シテ製作スル等頗ル改善ニ勵メシカハ所謂紀州傘トシテ聲價ヲ博シ販路擴大シ今日アルヲ致セリ明治三十一年一月重要物産同業組合法ニヨリ海草郡ヲ地區トシ組合ヲ設立シ益之カ改善發達ニ努力セリ

(五) 製造戸數及職工數 (二十八年)

製造戸數	一四六戸
職工數	九二〇人
内男	三六六人
女	五五四人

(六) 製造ノ狀況

本業モ亦漸次製産増加ノ趨勢ヲ現シ殊ニ三十五六年ノ如キハ著シク増加セリ然レトモ三十七八年ハ時局ノ影響ヲ受ケ商況沈淪ノ狀ニ陥リシモ三十九年ニ至リ景氣回復シ前途稍好望ナリ經營ハ小規模ニシテ家内工業ニ屬ス

(七) 原料ノ需要供給

原料竹ハ三分通リ本縣產ヲ使用シ爾餘ハ豊後、長門、大和地方ヨリ供給ヲ受ク紙ハ縣内產ヲ用キテ餘リアリ
荏油、桐油ハ共ニ枋木縣及大阪ヨリ輸入シ炭粉ハ土佐、陸奥ノモノヲ仰キ其他ハ縣内ノ產品ヲ用ツ

(八) 製産費及收益ノ比較

種類ニヨリ其製産費ヲ異ニスルモ平均百本ニ對スル製産費收益ノ割合左ノ如シ	
原料代	十二圓
製造費	三圓五十錢
收益	貳圓

(九) 販出額及仕向地

縣外販出額ハ産額ノ十分ノ五位ニシテ内國向ト外國向トハ九ト一ノ率ヲ保テリ
仕向地ハ内國向ハ東京、大阪ヲ主トシ外國向ハ滿州、韓國トス外國向ハ大阪及門司ヲ經テ輸出ス

(十) 販賣手續及取引慣習

製造者直接ニ各地ニ取引スルモノナク概シテ縣内ノ商人ニ現金ニテ賣渡シ商人ハ各地取引者ノ注文ニ應シ現金又ハ掛賣ニテ取引ス外國輸出ハ總テ大阪又ハ門司商人ノ手ヲ經由シ直接ニ輸出スル者トシ

(十一) 相場

種類ト時期及需供ノ如何ニヨリ多少ノ變動アリト雖平均百本ニ對スル相場約二十圓トス

(十二) 輸出ノ狀況

一時時局ノ影響ヲ受ケ沈衰ノ狀ニ陥リ輸出振ハサリシモ平和克復ト共ニ回復シ昨年ハ平年以上ノ好況ヲ見ルニ至レリ
本品ノ需要盛ナルハ東京市方面ニシテ大阪ハ從來微々タリシカ近時大ニ増加セリ外國輸出ハ僅ニ三四年以前ヨリ開始セラレシモ漸次好況ニ向ヒツ、アリ

(十三) 輸出先ニ於ケル嗜好

和歌山縣

内國向ハ上、中等ノ品ヲ好ミ外國向ハ安直ナルモノヲ歡迎スルモノ、如シ又一般傘蓋ノ淺キモノヨリ漸次深キモノヲ好ムニ至レリ

(十四) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

内國向ハ概シテ竹製籠詰百本入トシ藁繩ヲ以テ結束ス但上品ニ限リ木製箱詰トナス外國向ハ五十六本ヲ木製箱詰トナス其費用三十五錢乃至四十錢ヲ要ス

(十五) 重ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

運賃ハ和歌山市ヨリ一個ニ對シ東京マテ五十錢、大阪マテ二十錢ナリ外國向ハ釜山マテ五十錢、仁川マテ七十錢ナリ

製造者

海草郡

稻井彌三郎

全

角井半助

全

宮井定助

全

宮井定楠

和歌山市

阪田徳次郎

全

和田久右衛門

取扱商店

大阪市西區京町堀

吉田榮助

東京市日本橋區小網町

中村茂八

(九) 凍豆腐

(二) 産額

年次	數量	價額
三十八年	三八、二九五	一九六、六二二
三十七年	三八、三〇〇	一七七、一二五
三十六年	四七、五三〇	一九八、一五五
三十五年	四二、五八五	二〇九、九九二
三十四年	二六、〇四三	一一七、一〇二

(三) 主要産地

伊都郡

(三) 事業ノ沿革

當業ハ其起原最モ古クシテ何時代ニ屬スルヤ明確ナラス然レトモ伊都郡高野山ニ於テ製造ヲ創始セシヲ嚆矢トスルモノニシテ爾後漸次普及シ今日ノ盛況ヲ見ルニ至リタルモノニシテ明治二十六年斯業ノ改善發達ヲ圖ル爲メ大和河内紀伊ノ三國ヲ地區トシテ同業組合準則ニヨリ組合ヲ組織セリ又目下重要物産同業組合法ニ據リ組合設立ノ計畫中ナリ

(四) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數	一二七戸
職工數	六二八人
内男	六三三人
女	五人

和歌山縣

(五) 製産状況

本業ハ逐年盛況ニ趨キ殊ニ三十五年以來長足ノ進歩ヲ示セリ日露戰爭中モ軍需品トシテ需要盛ナリシカ爲メ反ツテ好況ヲ呈セリ而シテ平和克復後ハ一層販路擴張シ三十九年ハ前年ニ比シ其産額ニ於テ凡三千五百箱ノ増加ヲ來シ將來益有望ノ趨勢ニアリ經營ハ其規模概シテ狭少ニシテ工場作業ニ屬スルモノナク一般家内工業タリ

(六) 原料ノ需要供給

原料タル大豆ハ清韓ヨリ輸入スルモノ其七、八分ヲ占メ餘ハ河内、大和及縣内産ヲ用ツ

(七) 製産費及收益比較

一箱ニ對スル製産費及收益ノ比較左ノ如シ

原料費	貳圓八十八錢
製造費	壹圓八十錢
收益	九十錢

(八) 販出額及仕向地

産額ノ八九分ハ縣外ニ販出ス

内國向	販出額ニ對スル八分
外國向	二分
全	

内國向仕向地ハ大阪、神戸、堺、京都、名古屋、東京、門司、長崎其他各地トシ外國向ハ韓國及北米ニシテ神戸、大阪ヲ經テ輸出ス

(九) 販賣手續及取引慣習

外國向ハ阪、堺、神戸乾物問屋ヨリ輸出スルモノニシテ直輸出ヲナスコトナシ内國向ハ隨時注文ニ應ジ送荷スルモノニシテ現金取引若クハ掛賣トシ稀ニ荷爲替ヲ附スルモノアリ又委託販賣ニ由ルモノモ尠カラスシテ凡三分ノ一ヲ占ム委託販賣ハ手数料トシテ賣場金ノ百分ノ七ヲ交付シ荷爲替歩合ハ價格ノ五割乃至六割トス

(十) 相場

本品一箱(千個乃至千二百個入)ニ對スル平均相場ハ五圓乃至六圓ナリト云フ

(十一) 輸出状況

本品ハ十數年以前ハ内國ニ於テモ其販路極メテ狭少ナリシカ其後漸ク各地ノ需要ヲ喚起シ販路大ニ擴張セリ仕向先ハ大阪、神戸ヲ最トシ其他各地ニ續々輸出セラレ頗ル好況ヲ呈セリ

(十二) 輸出先ニ於ケル嗜好

海外輸出ハ小形ニシテ硬固ニ價ノ廉ナルモノヲ喜ヒ關東地方ハ中等品、關西地方ハ優等品需要多ク且ツ一般ニ大形ノモノヲ好ムノ傾キアリ

(十三) 荷造法其費用並ニ運賃諸費

木製長方形ノ箱詰トシ釘附ケヲナシ藁繩ヲ以テ結束ス其容量ハ一千個乃至千二百個トス此費用貳十五錢ナリ

運搬費(産地ヨリ)	
大阪	十五錢
堺	十一錢
神戸	十五錢

(十四) 重ナル製造者及内國ニ於ケル主ナル取扱商店

和歌山縣

重ナル製造者	岡本一郎
伊都郡	粉生瀧藏
同	津田喜市
同	石川吉左衛門
同	大東虎五郎
同	平田卯之助
主ナル取扱商店	川崎篤三郎
堺市	川崎幸兵衛
同	八百音商店
神戸市	三木茂商店
同	加藤甚助
大阪市	島田市兵衛
同	

(十) 製革

(二) 産額

年次	數量	價額
三十八年	二八、二〇〇 <small>枚</small>	一六三、〇〇〇 <small>円</small>
三十七年	三三、六一三	二二三、八七二
三十六年	二七、五八〇	一〇七、五九〇
三十五年	二五、八七七	一〇三、一七一
三十四年	二一、七八一	六九、〇七一

(二) 種類別
 厚多脂、薄多脂、
 靴底用皮、
 主要産地、
 海草郡、
 和歌山市、
 和歌山縣

(四) 事業ノ沿革
 當業ハ明治二年和歌山市内名草商會社ニ於テ獨逸ヨリ技師ヲ雇聘シ製革法ヲ習得シ創業セシヲ以テ嚆矢トナス其後

漸次事業發達シ製造者隨テ増加シ其主産地ハ海草郡ニ移ルニ至レリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十八年)
 製造戸數二十六戸ニシテ内一戸工場作業ニシテ其餘ハ家内工業ニ屬ス
 原動力ヲ使用スルモノ一戸ニシテ蒸氣力ヲ用キ五馬力ノ機械ヲ運轉セリ
 職工數七十四人

和歌山縣

(六) 製産狀況

本品ノ産額ハ明治三十六年マテハ十萬圓餘ニ過キサリシカ三十七年ニ至リ俄ニ増加シテ二十二萬餘圓トナレリ是レ軍需品トシテ需要劇増セシ結果ニシテ平和克復ト共ニ再ヒ常態ニ復セリ製産狀況ハ概シテ逐年好況ニ向ヒ前途頗ル多望ナリ

(七) 原料ノ需要供給

原料ハ總テ縣外ヨリ之カ供給ヲ仰キ牛皮ハ内國産ノモノ五分清、韓産ノモノ五分ヲ使用シ、櫛皮、油木皮ハ關東産五分北海道産五分トス概シテ大阪商人ノ手ヲ經テ輸入ス

(八) 製産費及收益ノ比較

種類品等其他ニヨリ差異アリト雖精製革十枚ニ對スル原料代四十六圓五十錢製造費貳圓五十錢ヲ要シ收益凡壹圓ヲ收ム

(九) 販出額及仕向地

販出額ハ内國向ハ産額ノ六分外國向ハ全四分ノ割合ニテ其仕向地ハ内國向ハ専ラ大阪トシ外國向ハ清韓兩國トス外國向ハ大阪商人ノ手ヲ經テ神戸港ヨリ輸出ス

(十) 販賣手續及取引慣習

概シテ現金取引又ハ荷爲替ノ法ニ依ルモノニシテ荷爲替ノ歩合ハ八分トス

(十一) 相場

種類品等其他ニヨリ差異アリト雖普通平均百枚ニ對スル相場凡六百圓ナリト云フ

(十二) 荷造法其費用及運賃諸費並保險料

木箱詰トシ釘付ヲナシ帶鐵ヲ施ス薄革ハ五十枚厚革ハ貳十枚ヲ一箱トス其費用約一圓ヲ要シ又ハ三十枚ヲ一括シテ莖或ハアンペラ包トナス其費用十三錢乃至二十五錢ヲ要ス

運賃ハ和歌山市ヨリ大阪マテ箱入ノモノ貳十錢清國上海マテ一圓韓國マテ七十錢ヲ要ス保險料ハ百圓ニ付五十錢ナリ

(十三) 重ナル製造者及内國ニ於ケル取扱商店

重ナル製造者	林 榮 次 郎
海 草 郡	朝 岡 善 右 衛 門
全 伊 都 郡	九 鬼 千 代 松
全	諏 訪 部 千 代 三 郎
取 扱 商 店	
大 阪 市	朝 岡 善 彌
全	德 田 治 郎 吉
全	中 野 清 兵 衛

(七) 和 紙

(二) 産 類

和歌山縣

年次

價額

三十八年	一四〇、四八二
三十七年	一五七、二六六
三十六年	一五七、七二三
三十五年	一四六、二五〇
三十四年	一四六、六七〇

(二) 種類別

傘紙、紙、塵紙、紙、半紙、紙、

屑紙、紙、美濃紙、紙、

(三) 主要産地

有田郡 日高郡 伊都郡

(四) 事業ノ沿革

營業ハ今ヲ距ルコト三百年以前ノ創業ニ係リ爾來今日ニ至ルマテ繼續セリ明治十年以後ハ原料低價ニシテ收益比較的多カリシヨリ倍々發達シ頗ル盛況ヲ呈セシカ明治二十年以降原料價格騰貴シ收益ノ減少セシヨリ一時衰退ノ傾アリ二十八九年頃ヨリ再ヒ原料價格低落セシト原料トシテ三椗、藁、襪襦等ヲ用キルニ至リシ爲メ多少收益ヲ増加シ年々好況ヲ呈シツ、アリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數 四四一戸

職工數 一、七〇七人

内男 七〇一人

女 一、〇〇六人

(六) 製産狀況

本品ハ年ト共ニ其産額ヲ増加シ販路益伸張ノ傾アリ之ヲ十ヶ年前ニ比スレハ産額殆ト二倍ニ達セリ前表ニ依レハ三十八年ハ産額稍低下ヲ示セルモ是レ原料騰貴ノ爲メ幾分製産ヲ手控ヘセシニ由ルモノニシテ事業上ノ衰兆トナスニ足ラス前途頗ル好望ノ趨勢ニアリ其經營ハ一般小規模ニシテ家内工業ニ屬シ且專業者ハ十分ノ三四ニシテ多クハ農商業家ノ副業的經營ニ係ル

(七) 原料ノ需要供給

原料タル楮皮、三椗ハ全部縣内ノ生産ヲ用ウ本縣ハ楮皮ノ産出豊富ニシテ殆ト不足ヲ感セシコトナク稀ニ岐阜縣或ハ靜岡縣ヨリ大阪ヲ經テ之カ供給ヲ仰クコトアリ其他ノ原料モ畧々前全様ニシテ唯石炭及苛性曹達ノミハ大阪ヨリ輸入ス

(八) 製産費及收益ノ比較

種類ト時期及需給ノ如何ニヨリ多少ノ差異アレトモ概シテ左ノ割合ナリト云フ

原料代	七分
製造費	二分
收益	一分

(九) 販出額及仕向地

和歌山縣

縣外販出額約十分ノ六ニシテ其中外國向約四割位ナリ
仕向地ハ内國向ノ大部分ハ大阪ニシテ外國向ハ大阪、神戸ヲ經テ清韓兩國ニ輸出ス

(十) 販賣手續及取引慣習

販賣手續ハ多ク仲買人ノ手ヲ經テ販出スルモノニシテ稀ニ委託販賣ノ法ニ依ルモノアリ代金ノ計算ハ概シテ一ヶ月一回トス

(十一) 相場

本品ノ目下相場ハ左ノ如シ

傘紙	一 締 (二貫二百目ニ付)	約 五 圓 五 十 錢
塵紙	全	約 一 圓 四 十 錢
普通半紙	全 (二貫目ニ付)	貳圓貳十錢乃至貳圓六十錢

(十二) 荷造法其費用并運賃

荷造法ハ一締毎ニ上下ニ表紙ヲ付シ之ヲ藁繩ヲ以テ縱横ニ結束ス此費用凡三錢
運賃ハ種類ニヨリ一定セサルモ大阪へ搬出スルモノ和歌山市ヨリ五錢乃至七錢ヲ要ス

(十三) 長所缺點并改良スヘキ要點

長所トシテハ保存ノ永キニ耐ユルコト及蠶虫ノ蝕害ヲ受クルコト少ク又水氣ニ浸潤スルモ其形態ヲ變セサルト紙質ノ強靱ナルトニアリ
缺點トシテハ墨附キノ悪シキト紙幅ノ區々ニシテ取引上常ニ不利ナルトニ在リ尙ホ一般ニ品質精良ナリト云フヲ得
又製造器械ノ如キ舊式ニシテ爲メニ品質ヲ損スルヲ以テ之カ改良ヲナスヲ要ス

(十四) 主ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

重ナル製造者	森本榮太郎
有田郡	上岡藤太郎
全	浦部新作
伊都郡	前田泰治
全	鹽路源兵衛
日高郡	小池與助
全	

取扱商店トシテハ特記スヘキモノナシ

(三) 木 蠟

(一) 産 額	年 次	數 量	價 額
三 十 八 年		一〇一、八〇九	一二九、〇二八
三 十 七 年		六七、九七三	三九、七二四
三 十 六 年		一八七、四五〇	一九一、八一三
三 十 五 年		一七二、〇二九	一二五、〇五二
三 十 四 年		一五四、二八四	九三、五七六

(二) 種 類 別
和歌山縣

- 生 蠟 晒 蠟 楡 實 粕
- (三) 主要産地 有 田 郡
- 海 草 郡

(四) 事業ノ沿革
 營業ハ其由來最モ古ク起原明確ナラサルモ元久年間有田郡箕島町田中某ナルモノ九州ヨリ始メテ苗木ヲ取寄セ栽培シ之ヲ製造セシヲ以テ嘴矢トスルモノ、如シ爾後縣内各地ニ普及シ殊ニ海草郡ノ如キハ益隆盛ニ趣キ遙ニ有田郡ヲ凌駕スルニ至レリ同業組合準則ニヨリ明治二十八年有田郡及海草郡ニ二十九年日高郡ニ各同業組合ヲ組織シ之カ改良發達ヲ圖レリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十八年)
 製造戸數 五六戸
 職工數 一三八人
 内男 一二五人
 女 一三人

(六) 製産狀況
 嘉永安政ノ頃ハ其産額巨額ニ上リ販路大ニ擴張セシモ其後漸次粗製濫造ノ弊ニ流レ聲價ヲ失墜セシ爲メ一時沈衰ノ境ニ陥リシカ維新前後ニ至リ當業者之カ改善ヲ圖リシト價格ノ騰貴セシトニヨリ再ヒ盛況ヲ見ルニ至レリ然ルニ明治七八年頃ヨリ又復衰退ノ兆ヲ現ハセリ是レ多クハ蠟燭ト運命ヲ共ニスルヲ以テ彼ノ代用品ノ壓倒スル所トナリシニ由ルナリ明治十五年頃海外ノ販路ヲ開キシヨリ稍景氣ヲ恢復スルヲ得タリト雖其産額往時ノ半ニ達セヌ殊ニ三十七年ノ

(七) 原料ノ需要供給
 如キハ産額ノ減少最モ甚シク是レ時局ノ影響ニ因ルト雖モ一般ニ需要減少ノ傾アリ三十八年ニ至ルモ尙ホ回復セス想フニ此ノ狀勢ヨリ推ストキハ將來大ナル發展ヲ見ルハ至難ノ事タルヘシ

(八) 原料ノ需要供給
 原料ハ一般ニ潤澤ニシテ縣内産ヲ以テシテ餘リアリ

生 蠟	百斤ニ對スル製産費	十九圓九十錢
原 料	製 造 費	三 圓 十 一 錢
收 益		貳 圓 六 十 錢
晒 蠟	百斤ニ對スル製産費	十九圓九十錢
原 料	製 造 費	四 圓 十 一 錢
收 益		貳 圓 六 十 錢

(九) 販出額及仕向地
 明治三十八年中ニ於ケル販出額ハ左ノ如シ

内 國 向	四〇、七二三貫
外 國 向	四〇、七二四貫

仕向地ハ内國向大阪、東京ヲ主トシ就中大阪最モ多ク内國向販出額ノ約六割ヲ占ム外國向ハ大阪、神戸ヲ經由シテ

輸出スルヲ以テ詳ナラス

(十) 販賣手續及取引慣習

多ク委託販賣ニシテ手数料ハ賣揚金高ニ對シテ生蠟ハ百分ノ二晒蠟ハ百分ノ四トス稀ニ延取引及現金取引ヲ爲スモ
ノアリ

外國向ハ重ニ大阪ノ問屋ノ手ヲ經テ輸出シ直接輸出ヲナス者ナシ

(十一) 相場

生 蠟 百斤ニ對シ 貳十一圓五十錢
晒 蠟 百斤ニ對シ 貳十五圓五十錢

(十二) 荷造法其費用并運賃及保險料

荷造法ハ苳包トシ藪繩ヲ以テ結束スルモノニシテ百斤入ト六十斤入トノ二種アリ其費用ハ百斤入十六錢、六十斤入
十六錢ヲ要ス

運賃ハ百斤入一個ニ付和歌山市ヨリ東京マテ貳十八錢大阪マテ十四錢トス保險料ハ百圓ニ付十五錢ナリ

(十三) 販出先ニ於ケル代用品及競争品

内國ニ於テハ近年支那産ノ蠟輸入ノ爲メ大ニ打撃ヲ受ケツ、アリ該品ハ品質劣悪ナレトモ價格低廉ナルヲ以テ之ヲ
混用スル者多ク其勢力侮ルヘカラサルモノアリ

(十四) 重ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

重ナル製造者 有 田 郡 上山 榮 一 郎

海 草 那

吉 田 長 楠

全

湯 川 英 一 郎

全

瀧 本 要 左 衛 門

取 扱 商 店

門 脇 重 一 郎

東 京 市 日 本 橋 區 伊 勢 町

小 倉 芳 藏

東 京 市 日 本 橋 區 本 石 町

松 澤 彌 八

大 阪 市 東 區 中 島 三 丁 目

川 原 儀 六

大 阪 市 南 區 新 瓦 屋 町

廣 野 與 右 衛 門

(十三) 棕 梶 繩 網

(一) 産 額

年 次	繩 網 數 量	價 格
三 十 八 年	三三三、〇一〇	一〇一、一五五
三 十 七 年	一一四、二九九	六九、二七六
三 十 六 年	一九、五〇〇	三〇、七三四
三 十 五 年	四六、六五一	四六、七五七
三 十 四 年	一四四、二八六	四四、七七三
	一六三、八八五	
	一三三、〇〇〇	
	一六三、八八五	
	七八、八七二	

和歌山縣

(一) 主要産地

海草郡 那賀郡 和歌山市

(三) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數	六八三戸
職工數	二、七三八人
内男	九七六人
女	一、七六二人

(四) 製造状況

本業ハ數年前マテハ微々トシテ振ハサリシカ近年漸ク販路ヲ擴張シ産額増加セリ經營ハ概シテ小規模ニシテ家内工業ニ屬スルモ將來有望ノ一事業タルヘシ本品ノ需要地ハ東京ヲ第一トシ殆ト産額ノ半ヲ仕向ケ大阪之ニ次キ其他中國北海道、九州等之ニ次ク

(五) 原料需要供給

原料棕栲ハ全部縣内ノ産ヲ用ウ其供給ハ豊富ニシテ不足ヲ見ルコト稀ナリ

(六) 製産費及收益ノ比較

種類ト原料需供ノ如何ニヨリ多少差異アリト雖モ十貫目ニ對スル平均製産費及收益ノ比較ハ大約左ノ如シ

原料	九圓五十錢
製造費	參圓
收益	貳圓五十錢

(七) 販出額及仕向地

縣外販出額ハ産額ノ殆ント全部ニシテ其仕向地ハ前ニ述フル所ノ如シ

(八) 販賣手續及取引慣習

注文ニ應シ販出スルモノニシテ着荷ノ上現金取引トナス

(九) 相場

種類品質ト需供ノ如何ニヨリ多少ノ變動ハ免レサルモ平均百貫ニ對シ約百五十圓位トス

(十) 荷造法其費用並運賃

輕重大小ニ拘ラス一條ヲ卷束シ蒔包トナス其費用約七錢ヲ要ス
運賃ハ和歌山市ヨリ北海道マテ一才ニ付十一錢、東京マテ九錢ヲ要ス

(十一) 重ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

製造者	山本勝之助
海草郡	井上兼松
同	

取扱商店トシテ特ニ記スヘキモノナシ

(四) 再織

(一) 産額

和歌山縣

年次

數量

價額

四百六

三十八年

四四、七八円

七八、五五円

三十七年

二九、五四〇

八〇、一四二

(三) 種類別

頸卷 敷物 肩掛

外國向頸卷ハ長五尺、巾九寸量目一打ニ付三百九十匁

敷物ハ卓掛、敷布ノ二種アリテ卓掛ハ長三尺乃至五尺方形ニシテ量目約百八十匁敷布ハ長六尺巾四尺ニシテ量目約百八十匁マヌ

(三) 主要産地

伊都郡

(四) 專業ノ沿革

本業ハ今ヨリ三十年前伊都郡名倉村大字名倉前田安助ナル者之ヲ發明創業セシヲ嚆矢トス當時ハ内地婦人用襟ノミヲ製造セシカ其後頸卷、肩掛、敷布等ヲ織製スルニ至リ漸次改善ヲ加ヘ遂ニ今日アルヲ致セリ其再織ト名ケタルハ一皮織リタルモノヲ細カニ截斷シ之ヲ捻リ上ケ緯トシテ織リタルモノナルカ故ナリ

(五) 製造戸數及職工數 (三十八年)

製造戸數 一〇戸

職工數 三〇〇人

(六) 製産狀況

本品ノ製造ハ伊都郡ノ獨占ニシテ他ノ各郡ニ於テハ之ヲ織製セス經營ハ一般ニ小規模ナレトモ皆工場組織ニテ之ヲ製織セリ本品ハ販路尙ホ狹少ニシテ產額増加ヲ見ルニ至ラス是レ未タ充分需要者ノ嗜好ニ投スル能ハサルニ因ルモノニシテ將來其形狀意匠ヲ改良セハ輸出向トシテ好望ナルヘシト云ヘリ

(七) 原料ノ需要供給

綿絲及染料ハ大阪及堺ヨリ之カ供給ヲ仰キ糊粉ハ大阪ヨリ輸入ス

(八) 製産費及收益ノ比較

頸卷一打ニ對スル製産費及收益ノ比較ハ原料壹圓三十錢五厘、製造費七十四錢、收益約二十錢ニシテ其他ノ製品モ之ト大差ナシト云フ

(九) 販出額及仕向地

販出額ハ殆ント製産額ノ全部ニシテ仕向先ハ外國向ニアリテハ北清、韓國及浦港ニシテ經由港ハ大阪、神戸トシ内國向ハ大阪トス

(十) 販賣手續及取引慣習

外國向ハ大阪ノ商人ノ手ニ賣却シ商人ハ之ヲ外商ニ賣渡スヲ常トス又内國向モ同様大阪ノ商人ニ賣渡スモノトス

(十一) 相場

種類品質ト需供ノ如何ニヨリ數々小變動ヲ免レス肩掛ノ如キ三十九年七月頃四百多ノモノニ對シ三圓以上ヲ稱ヘシモ漸次下落シテ年末ニハ三百多ニ對シ一圓五十錢トナレリ
敷物ハ一枚平均壹圓二十五錢位ナリ

(十二) 荷造法其費用並運賃諸費

額卷ハ四十打ヲ敷物ハ百枚ヲ各一括シテ莖包トナス

阪神地ニ於テハ各仕向地ニ隨ヒ相當箱詰トナス莖包一個ニ對スル費用凡十二錢ナリ

運賃ハ前記一個ニ對シ産地ヨリ大阪マテ凡四十錢ヲ要ス

(十三) 重ナル製造者及内國ニ於ケル重ナル取扱商店

重ナル製造者

伊都郡

平林甚助

全

稻葉竹之助

全

太田暁一郎

全

中村岩吉

重ナル取扱商店

大阪市

安部元壽

全

三露商店

全

楠本常七

全

濱口商店

全

糸平商店

全

平林商店

明治四十一年八月十二日印刷
明治四十一年八月十五日發行

農商務省商工局

東京市京橋區瀧山町六七番地

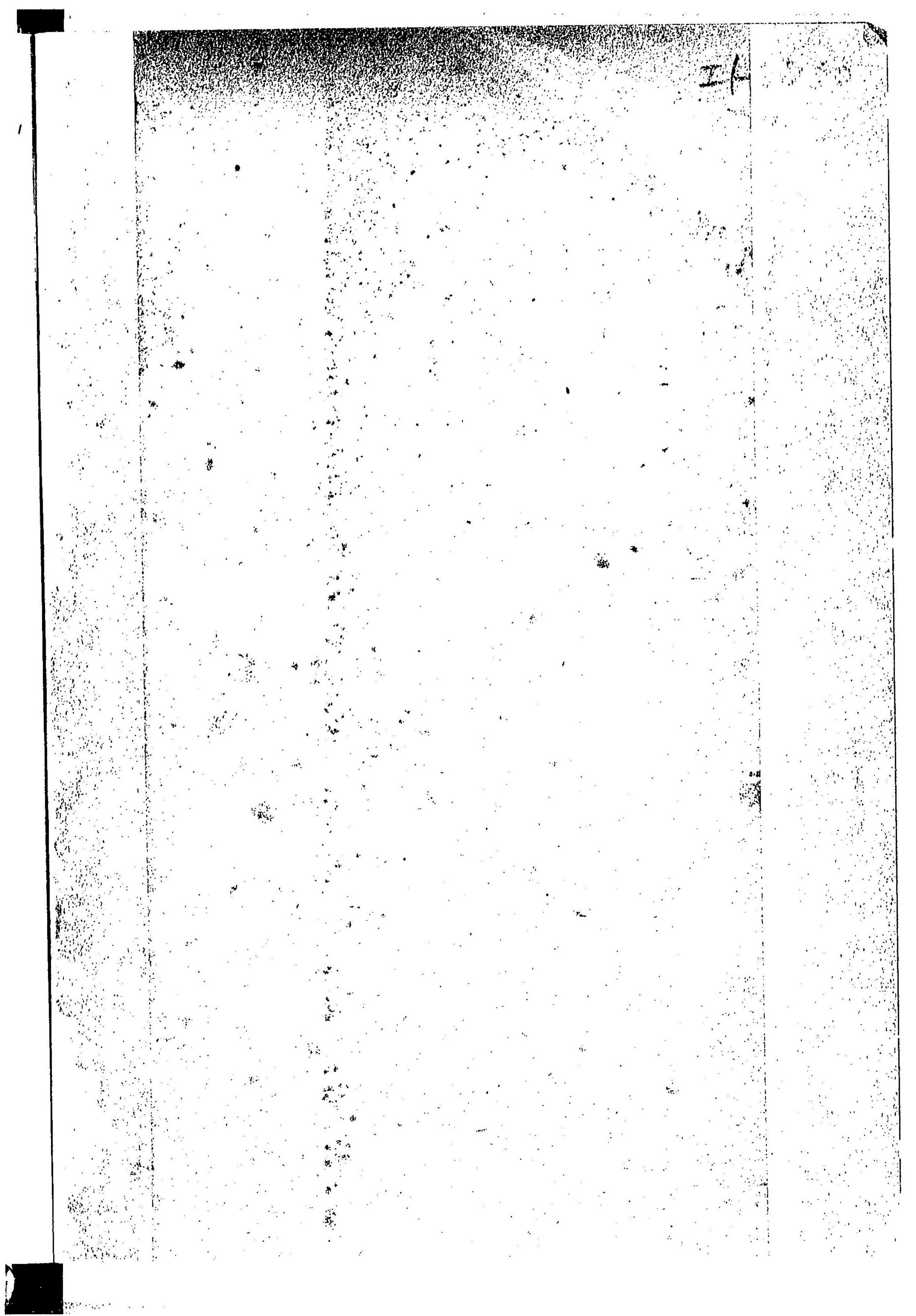
印刷者 小川邦孝

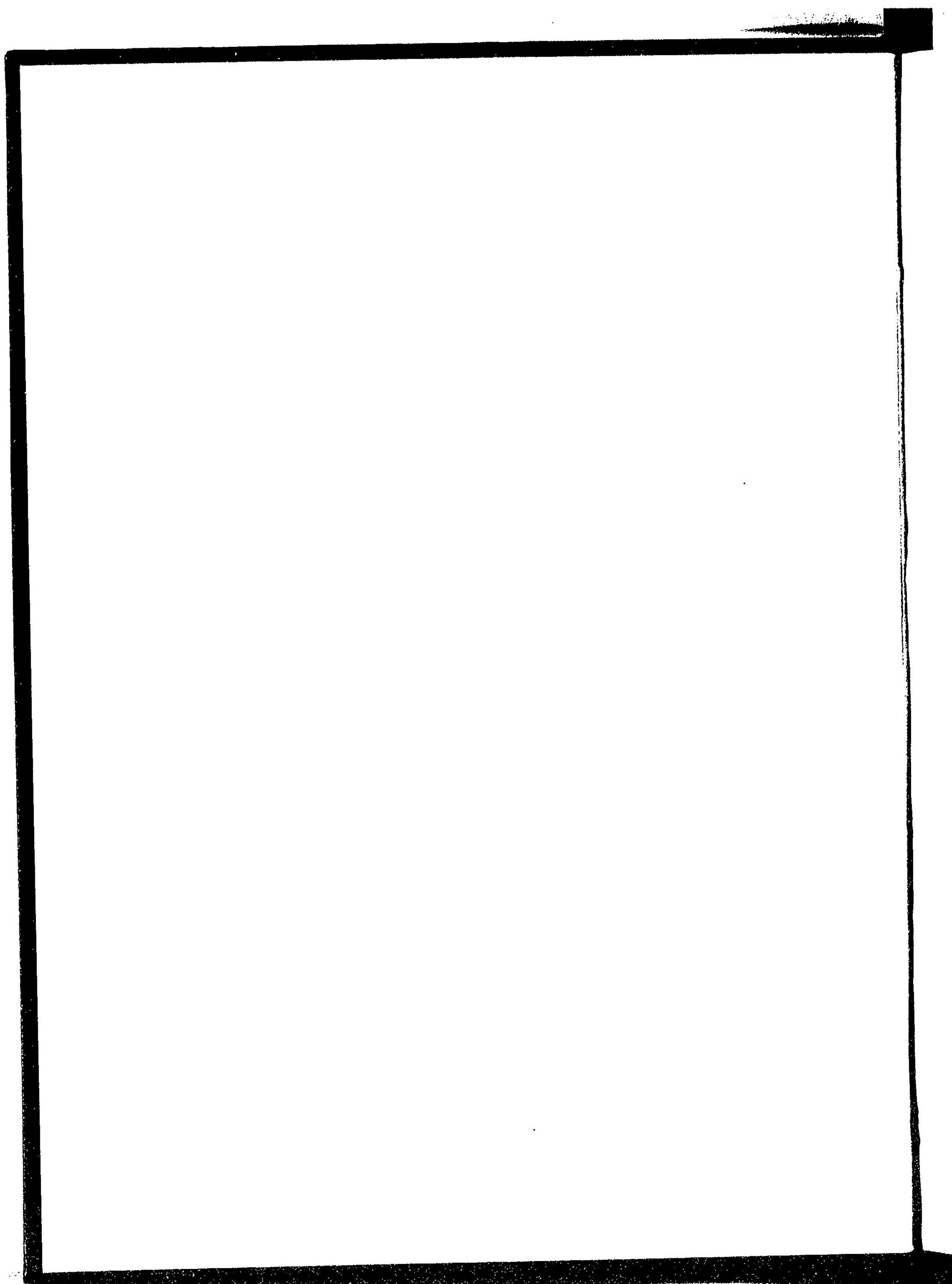
東京市京橋區瀧山町六七番地

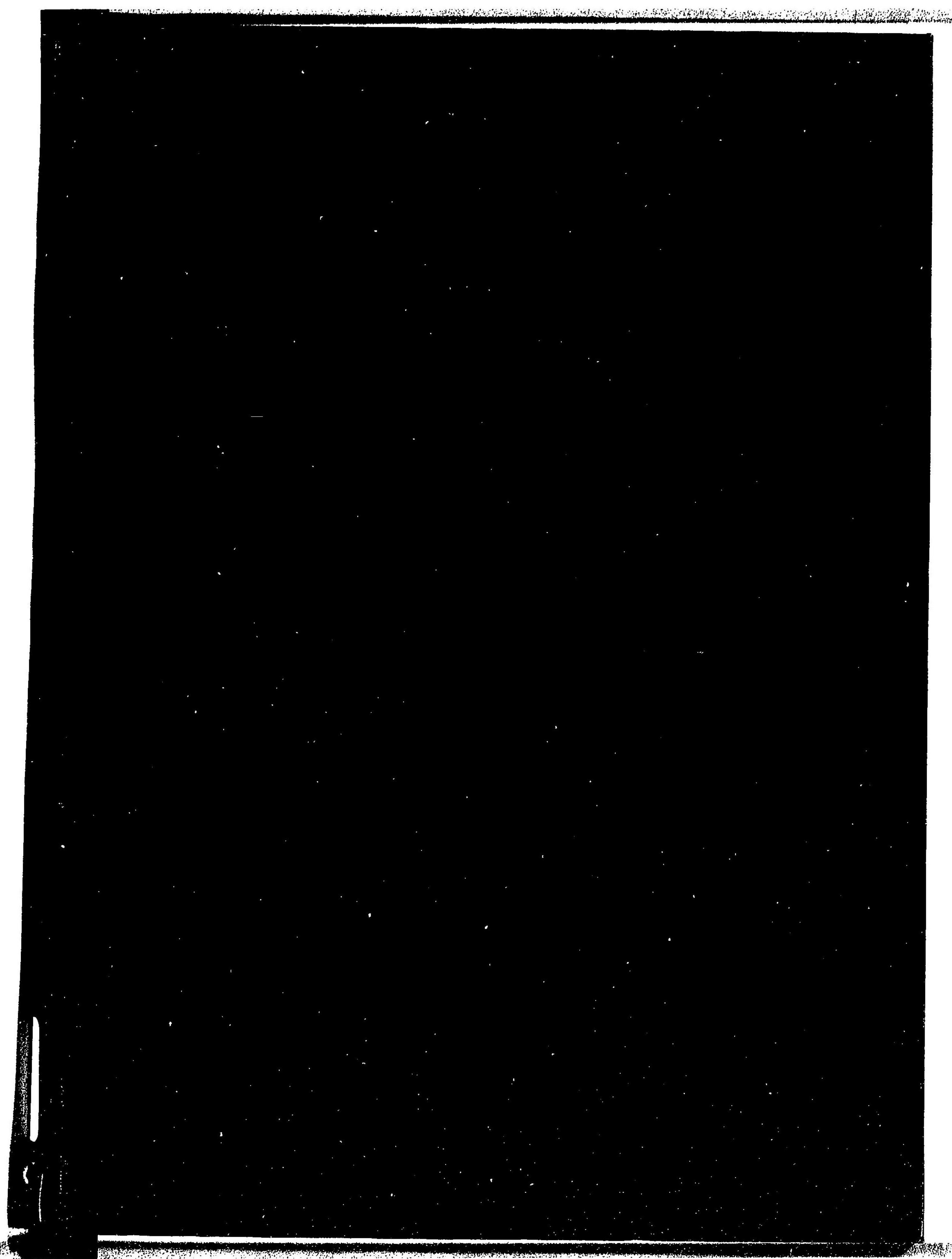
印刷所 東京製本合資會社

電話新橋

三三七九
四九三七一五







321

42

Ⓜ